国際関連情報 Report from IASB

Accounting for Dynamic Risk Management プロジェクトの検討状況

ASBJ 専門研究員
IASB 客員研究員
山下 裕司（やました ゆうじ）

Accounting for Dynamic Risk Management プロジェクトにつきましては、2015 年 2 月および 3 月に、Discussion Paper（DP）‘Accounting for Dynamic Risk Management: a Portfolio Revaluation Approach to Macro Hedging’ に対するコメント・レター分析が行われました。本稿では、その後の検討状況を概説します。

プロジェクト・プラン

5 月に、今後のプロジェクト・プランについて理事会で議論がなされました。

この議論の前提となったのは、DP に対するコメント・レター分析です。本誌 49 号でご説明したとおり、同分析を通じて明らかになったのは、作成者、ユーザー、監督当局など関係者の間で、当プロジェクトの目的に関する見方が大きく異なっているということです。このため、どのような会計モデルであっても、関係者間の異なるニーズをバランスさせることは、大変なチャレンジです。

これを受け、今回の理事会では、どのようなアプローチであっても、ダイナミックなリスク管理活動に対する関係者の情報ニーズを勘案すること、そして、こうした情報ニーズを満たす観点から、開示および認識・測定の首尾一貫したセットの開発を目指すことが確認されました。

さらに、同理事会では、以下の暫定決定がなされました。

- ダイナミックなリスク管理活動に関する情報ニーズをどのように満たし得るかをまず開示において検討し、その後、認識・測定において対応すべき点を考慮する。
  （注）なお、このアプローチは、「開示」と「認識・測定」をフェーズを分けて検討するという趣旨ではありません。あくまでも開示と認識・測定の首尾一貫したセットの開発を目指すのですが、分析のプロセスにおいては、開示を先に検討するという意味です。
- 金利リスクの検討を優先する。
  （注）①多くの金融機関が金利リスクをダイナミックに管理している一方、事業会社がコモディティ・プライス・リスクなどをダイナミックに管理している例は少ないこと、②異例の低金利が続くなか、コア要求払い預金の問題がますます大きくなること

が見込まれること、を受けた判断です。

7月には、デュー・プロセスおよび情報ニーズを特定するプロセスについて、理事会で議論がなされました。

デュー・プロセス

DPは、関係者の見方を収集し、かつ当該プロジェクトに対するニーズが強いことを確認するうえで有効でした。しかし、当プロジェクトに対するニーズがユーザーと作成者の間で大きく異なることなどを踏まえると、DPを通して、次のデュー・プロセスとしてExposure Draft（ED）に直接進むことを後押しするほどの情報を収集し得たかとなると、疑問なしとはいえません。

このため、理事会は、次のデュー・プロセスとして、2回目のDPを目指すことを暫定決定しました。

一方で、理事会は、次のステップとしてEDを公表する可能性を完全に閉じることはしないことも、暫定決定しました。スタッフとしては、提案する会計モデルを可能な限り絞り込んでいく所存です。この過程で、開示および認識・測定の首尾一貫したセットを基準のかたちで提示することが可能との判断に至れば、EDに直接進むことの可否を改めて理事会に諮ることとなります。

情報ニーズを特定するプロセス

この議題で一番大きな議論となったのは、今後の情報ニーズを特定するプロセスにおいて、「金利リスクに晒されていて、かつダイナミックなリスク管理を行っている企業」と「金利リスクに晒されているが、ダイナミックなリスク管理は行っていない企業」の比較可能性を考慮すべきか否かという点です。

理事会は、情報ニーズを特定するに当たっては、双方を視野に入れることを暫定決定しました。